14年続く縁 小美玉が第二の故郷に

みの～れコンセプトの1つ「子どもたちの未来のために」を体現する事業として、学校アクティビティ（交流）事業が始まって24年。現在は小美玉市全域の保育園、幼稚園、小学校、中学校へプロの演奏家が出向き、子どもたちは本物の音楽や楽器に間近で触れることができます。14年前から和楽器の音色を届けてくれている薩摩琵琶・琴古流尺八奏者の長須与佳さんにインタビューしました。

毎年学校交流 歓喜の声響く

長須さんは琵琶と尺八を演奏する二刀流。那珂市で生まれ育ち、現在は東京在住の長須さんが琵琶と出会ったのは小学4年の時。祖父の家の納戸から白い布に包まれた琵琶が出てきたそうです。琵琶専門店で直してもらったら、「これは大事に使った方がいい」と言われて習い始めました。

全長96㎝もある琵琶は小学4年生には大きすぎて「手を伸ばしても細い弦しか押さえられないんです。しかもバチの大きさは大人と一緒なので指が痛くて。早く稽古が終わらないかなと思っていました（笑）」。それでも「子どものうちに琵琶に出会って良かったと思っています」と懐かしげ。

海外公演も行う長須さんが演奏する際に大切にしているのは、その場の雰囲気に合わせること。子どもたちの前で演奏する際には「楽しそう、やってみたいって思ってもらえるように口角を上げて微笑んで弾くように気を付けています」。毎年、小美玉市の学校アクティビティ事業で子どもたちに会うと「琵琶を始めた頃の気持ちを思い出します」と語ります。

14年前から小美玉市学校アクティビティ授業を始めてから「あっという間に月日が流れました」と長須さん。「小さかった子どもたちが親になって、保育園や幼稚園で『うちの子なんです』なんて連れてきてくれたら嬉しいだろうな」と笑みを浮かべます。「日本独特の文化や音楽を何か1つでいいから知ってくれたら、人間的に豊かになれるんじゃないかな、そうなってくれたらいいなという願いがあって、その要素の1つに琵琶が入ってくれていたらいいなと思っています」。

長須さんにとって、みの～れは毎年帰ってくる拠点。「ずっと変わらず『みんなで創る』を貫き、市民の皆さんがイキイキと輝いていて、本当に素晴らしいです」。こんなにも長くご縁が続いている小美玉を「第二の故郷だと思っています。市内の学校や施設など、どこに行っても親せきの娘が帰ってきてくれたみたいに歓迎してくれて本当に嬉しいです。『来なくていいよ』と言われるまで小美玉に来たいと思っています」と笑います。

今年も間もなく小美玉市学校アクティビティ事業が始まる季節がやってきます。教室や音楽室など、演奏家の息づかいや体温を感じる距離で本物に触れられる「一生忘れられない体験」。子どもたちの歓喜の声が、教室に響き渡ります。（藤田佐知子）

薩摩琵琶・琴古流尺八奏者

長須与佳（ながす ともか）さん

みの～れと共に生活するスタイル
Minole Life のすすめ
No.205